

第Ⅳ章 総括

今次調査で特筆される遺構は溝址1である。今次調査地点の西側、溝址1延長線上には伊賀良井（大井）があり、調査地点付近で伊賀良井は東南東方向に流れを変えている。一方、鈴岡小笠原氏の居城鈴岡城は南東約1.2km（主郭までの距離）にある。そこで、両者との関係性について考えてみる。

1 伊賀良井（大井）について

伊賀良井は、飯田松川から取水され、中位段丘上を潤してきたが、その潤したエリアが信濃国守護小笠原氏の主要な基盤である伊賀良庄をカバーすることから、古代末以来当地方の政治・経済活動に重要な役割を果たしてきた灌漑用水といえる。

伊賀良井の開削主体及び開削時期は、これまで先学によりいくつかの説が提示されている。主なものを紹介すると、

- ①「伊賀良井」の原初的開削は荘園の領家である妙香院ないし尊勝寺等の指導的な開発により平安時代中期あるいは遅くも末期上葉に開始されたと推測、中世殊に鎌倉期に伊賀良井地頭江馬北条氏により大規模な拡張、水路の延伸、耕地の拡大等行われたとする宮下操氏の説（下伊那誌編纂會 1967）
- ②「室町時代（それも余り早い時期ではない）に、領主小笠原氏の力によって、伊賀良井は名古屋及び上殿岡のはずし場まで引かれた。末期に松尾、鈴岡城が築かれるに及んで、伊賀良井の水は両域の用水に引かれた」とする筒井泰蔵氏の説（伊賀良村誌編纂委員会 1973）
- ③『信州伊奈郡北方郷之舊記』により、奥山平太夫が承保2年（1075）北方南方両郷の中央笛吹に居館を構えるにつき水を引用したのに始まり、小笠原新左衛門光佐盛・弟の尾曾九助経廣の太郎井・次郎井伝承と松尾城・鈴岡城を結び付けた村沢武夫氏の説（村沢 1981）

文献上伊賀良庄の初出は、尊円親王編の『門葉記』所載の「妙香院荘園目録十一箇所事康平六年五月二十日注之」である（下伊那誌編纂會 同前）。また、伊賀良井から毛賀沢川に水落とししたと考えられる殿原遺跡溝址3出土の山茶碗（飯田市教委 1992）の年代観は、高台に粉殻痕があることから、12世紀半ば（藤沢良祐 2008）以降に位置づく。溝の性格上、遺物の流れ込みを考慮すると遺物の年代観は溝の開削時期を示すものではないが、康平6年（1063）以前に伊賀良庄が成立していたことを考え合わせると、宮下氏が推測するように、伊賀良井の開削は平安時代中期あるいは遅くも末期上葉に開始され、平安時代末期には上殿岡まで開削されていた可能性がある。

中世には、荘園領主の支配下にある荘務機関である公文所がおかれたと考えられる地名が今次調査地点の西方約600m付近にあり、この付近まで伊賀良井は延伸されていたものと考えられる。さらに、伊賀良井は、鈴岡城址の南側松ヶ崎（寺山ともいう）の尾根を切断して「外場（はずしば）」が設けられ、水を新川に落とされている。この外場は鈴岡城の堀に比肩されるもので、鈴岡城の防御施設の一端を担う目的で開削された可能性がある（飯田市上郷考古博物館 2009）。鈴岡城に拠った小笠原氏により中世のある時期までには伊賀良井が鈴岡城まで延伸されていたことを示すと考えられる。

2 鈴岡城への引水について

鈴岡城は、信濃国守護を務めた鈴岡小笠原氏の居城で、南北朝時代に小笠原宗政が築城したとされるが、松尾小笠原氏から文明年間（1469～86）頃に分家したとされることから、この頃とみる説もある（羽生 2013）。

鈴岡城の水の手については、城内二の郭の井戸の他、用水が知られる。

用水の一つは、「鈴岡城への引水は、上殿岡のはずし場から伊賀良井の水を毛賀沢へ落していたのを、そのすぐ下流（久米街道のすぐ東の羽場地籍）から上げて、毛賀沢南斜面をたどって城中に引いた。これは清水井と呼ばれ今でもその井筋跡を見ることが出来る」とする筒井氏の説（伊賀良村誌編纂委員会 1973）で、宮下氏（下伊那誌編纂会 1970）や村沢氏（村沢 同前）も同じ立場である。北方・上殿岡境から毛賀沢川に沿った段丘縁辺部、鈴岡城址まで点々と「清水井」の小字が確認できる（伊賀良を広める会 2010、竜丘史学会 2013）。段丘の縁辺に沿わせて井水を引くという一般的な方法で、詳細時期不明ながら、北方西の原遺跡（飯田市教委 2017）の溝址001SD等に類例がみられる。なお、「清水井」取水口の上流部、上殿岡の「はずし場」は、殿原遺跡（飯田市教委1987・1992）で調査された溝址3とは異なり、溝址3の上流側約400mに位置する。

用水のもう一つは、前述の「伊賀良井は、（中略）大規模な改修は小笠原氏が鈴岡城（飯田市）に引いたときになされたともいわれている。」（福島 1999）との伊賀良井からの引水の記述である。上述の「はずし場」からの清水井の引水とは別内容と考えられるが、この説の論拠は示されていないため、詳細は不明である。

3 溝址1の形態と機能について

次に、溝址1の形態、特に断面形について、検討を加える。

断面形は、上部がやや緩やかにそして底部付近が直に掘り込まれる、逆三角形に近い箱葉研状を呈する。箱葉研状に掘り込まれた溝あるいは堀は、これまで市内では、座光寺地区の恒川遺跡群・稲荷坂遺跡、上郷地区の原の城城跡・今村遺跡、旧市地区の飯田城跡、伊賀良地区の殿原遺跡・三日市場大原遺跡・中川遺跡、竜丘地区の鈴岡城址等で確認されている。

恒川遺跡群14次調査地点1区溝址37（飯田市教委 1991）は古代伊那郡衙の区画溝で、上部の幅約3m、下部約1.6～2m、深さ50～100cmで、中段までは緩やかで以下ほぼ垂直に掘り込まれる。断面は概ね逆台形を呈する。

殿原遺跡溝址3（飯田市教委 1992）は平安時代末期までには開鑿された灌漑用水と考えられ、ところどころ膨らむ部分を除くと、上部幅4m前後、底部幅3m前後で深さ100～150cmを測る。下半は垂直に立ち上がり、上半も比較的急な立ち上がりを示す、逆台形状を呈す。後述のとおり、伊賀良井の毛賀沢川への水落とし（はずし場）であったと考えられる。こうした類例は、三日市場大原遺跡・中川遺跡（飯田市教委 1996）等にみられる。

鈴岡城址二郭堀ハに設定された17トレンチ及び二郭9トレンチSD05（飯田市教委 2009）は中世城郭の防御施設である。二郭堀ハは新旧2時期あり、二郭との比高差6.9m、法面の傾斜は25～35°程度を測る。SD05は幅2.3m深さ1.4m以上で、断面形はV字に近い2段落ちを呈する。断面逆三角形に近いタイ

ブで、他に、高森町古城城・松源寺平遺跡・新井遺跡・宮沢遺跡等でも調査されている。このうち松源寺平遺跡の溝は松岡城内に引かれた用水と考えられている。

こうした堀・溝址の事例の中で、今次調査で調査された溝址1の断面形と類似するのは鈴岡城跡二郭の堀・溝址等中世城郭に関係するもので、今次調査の溝址1の機能については防御施設ないし用水が考えられ、中世に位置づく可能性が高いと考えられる。

防御施設としての機能を想定した場合、位置からみて溝址1は必ずしも下の原の台地を効果的に区切っているとはいえない。前述した埋土の状況から想定される掻揚げ土によるマウンドの存在を考慮しても、溝の幅は容易に跨ぎ越えることが可能である。仮に、マウンドが鈴岡城防御のための施設としても、むしろ守るべき対象がある溝の南側に掻き揚げた方が効果的に防御機能を果たせる。さらに、溝の両側に柵が、底面に逆茂木等が設置されたりした痕跡は確認できない。防御施設である可能性は低いと考えられる。

一方、用水である可能性は、溝址1が仮に開渠であったとすれば、溝の底面レベルは西端側が標高519.13m、中央部で標高519.17m、屈曲部で標高519.32m、東端側が標高519.30mで、本来低いはずの下流側が高く、用水としての機能を備えていない。また、底面の観察結果からは水が流れた痕跡は把握できなかった。前述のとおり、断面観察結果は溝の下半が一気に埋め戻されたことを示すが、開渠とすれば埋め戻しは不自然で、開削後月日を置かず計画変更され実用に供されなかった可能性が考えられる。一方、下半の埋め戻しが鈴岡城への引水を目的として樋あるいは管状の設備を埋設したことを示す可能性もあるが、そうした暗渠の痕跡も断面で確認できなかった。

現段階では、用水について2つの可能性を指摘するにとどめる。1つは、溝址1の主軸方向は、屈曲部より西側はN90° E、屈曲部より東側はN134° Eを測るが、溝址1屈曲部と鈴岡城主郭を結ぶ線もまたN135° Eを示すことから、鈴岡城への引水を企図して開削された可能性である。もう1つは、今次調査地点西側の伊賀良井の現河道方向はN93~99° E、同じく調査地点南側の河道方向はN137~148° Eで、溝址1の方向と近似することから、当初今次調査地点まで掘削し供用予定されていたものが、何らかの理由により約100m上流側で現河道に向きを変更した可能性である。

調査の成果は以上のとおりであり、開削時期について埋土上層から出土した近世磁器以外に時期を証するものはなく、形態の類似性から中世の遺構と推定するにとどまるが、溝址1の断面形や検出位置から伊賀良井ないし鈴岡城と密接にかかわる可能性が指摘される。伊賀良荘や伊賀良井、さらには小笠原氏とその営んだ城館群等々、当地方の古代中世史の研究上、多岐にわたり関連することが考えられる。また、今次調査地点では断片的な遺構・遺物の把握にとどまったものの、隣接する民間開発調査地点を含めた縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落の追求は大きな課題であり、今次調査地点周辺でのさらなる文化財保護の取組みが求められている。